

氏名・本籍	三島 利江子（兵庫県）
学位の種類	博士（文学）
報告番号	甲第123号
学位授与の日付	令和5年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項 該当者
論文題目	EMDRの両側性タッピングと自律神経評価 ——タッピングのあり方について考える——
審査委員	(主査) 教授 森 茂起 (副査) 教授 川田 都樹子 (副査) 教授 栗田 宣義 (副査) 教授 池上 知子 (副査) 田中 究 (ひょうごこころの医療センター院長)

論文内容の要旨

本論文の目的は、眼球運動による脱感作と再処理法（Eye Movement Desensitization and Reprocessing；以下、EMDR）の効果メカニズムを明らかにすることを長期的な目標にすえ、EMDRの特異的な特徴でありながらその効果について不明な点が多い両側性刺激（bilateral stimulation；以下、BLS）に焦点を当て、その効果の検証を試みることであった。

まず、EMDRのBLSにまつわる論争を概観し、手続きが曖昧なままになっている肯定的な記憶を扱うエクササイズ中のBLSを本研究のテーマとして扱うことを示した。また、BLSには3種類（眼球運動、触覚刺激、聴覚刺激）があり、どれを用いてもEMDRセラピーは成立するのであるが、実践の中で臨床家らが、触覚刺激（中でもタッピング）の利便性や強みを感じていることが推定される事例が増えており、本研究では触覚刺激に焦点を当てることとした。そして、触覚BLSに関する文献レビューを行い、先行研究を整理した。その結果、EMDR研究の中では触覚刺激を扱った実証研究が非常に少ないこと、さらに触覚刺激の速度の違いを独立変数として検討したものがないことが判明した。現時点では、肯定的な記憶を扱うEMDR

エクササイズ中は、BLS を用いても用いなくても構わないが、用いる場合は遅い速度で使用するという指針が出されているが、触覚 BLS に関してその妥当性を裏付ける実証研究は存在していなかった。つまり、現時点の指針が、臨床上の印象が主な根拠となっており、神経生理学的な裏付けを伴ったものではないことが判明した。本研究では客観的な生理指標を判断材料として、方法の妥当性の検証を行いたいと考え、自律神経に着目した。実証研究では、肯定的な記憶を扱うエクササイズを、タッピングの有無の2条件で行い、主観評価と自律神経評価について調べた。その結果、主観と生理指標の結果に相違が見られたため、自律神経評価の方法論を検証する必要性が考えられた。そこで、次は複数ある心拍変動解析について調べ、事例を通してローレンツプロット解析の有用性を見出し、自律神経評価の信頼性を高めた。その上で、肯定的なイメージにひたる最中、タッピング刺激の速度だけを変えて実証研究を行った。探索的に用意した3種類のタッピング速度の中では、1回/1秒のときに自律神経系のパフォーマンスが良い結果であった。当該速度は3速度の中で心拍リズムに最も近い速度であったことから、今後は心拍数を考慮した速度の検証が必要と考えられた。最後に、本研究で明らかになったことと残されている課題を論じた。

審査結果の要旨

本研究は、効果検証が十分行われ、WHO によって特に推奨されているトラウマ焦点化心理療法の一つである EMDR の技法について、実験研究によって検討したものである。著者は、複数の構成要素からなる EMDR が、その全体としての治療効果は十分検証されているものの、BLS の種類や刺激の速度といった細部の判断については、実践家の臨床的判断に委ねられており、また専門家の判断が一致しない場合もある状況を踏まえ、本研究は、よりエビデンスに基づいた治療実践を実現するための一歩として、「安全な場所」のワークに用いる触覚刺激による BLS の効果を検証している。

論文の構成は、まず EMDR の効果検証を行った先行研究と、その過程で起こったさまざまな論争を詳細に辿るところから始まる。著者による徹底的な文献調査によって、現時点までの知見が整理されるとともに、専門家間の不一致点が明らかにされ、今後の検証の必要性が示されている。文献研究の質の高さ、論点の整理による当該分野への貢献に高い評価が与えられた。

実験研究では、まず TP による効果を主観的評価と生理指標の両者によって検討し、その相違から生理指標の検討の必要性を認識し、ローレンツプロットによる視覚的判断を一つの選択肢とし、パイロットスタディーによってその有用性を確認している。この間の研究の進行も、先行研究を詳細にたどりながら、緻密でバランス

感覚に優れた粘り強い議論に基づいている。その結果、EMDR 研究では従来行われてこなかった方法による実証研究の可能性が開かれている。最終的に、第7章で報告される本研究の中核を成す実験を行い、「安全な場所」などの安定の基盤を築く技法では、遅い速度のBLSを用いることが推奨されていたのに対し、中程度の速度が良い結果をもたらすという結果を得ている。その結果分析においても、性急に結論を導くことなく、慎重に各指標を比較検討し、今後の研究を刺激する結果を導いている。

得られた知見はそれぞれ重要なものであるが、最終的に目指されるEMDRの諸要素の効果検証という目的からすれば、未だ限定的な成果にとどまるものである。しかし、個々の結果だけでなく、心理的介入によって自律神経指標がどう変化することが望ましいのかという基本的な問題意識を持つことの重要性を示すことができたのは、本研究の大きな成果である。先行研究の分析方法では、心拍数を計測して心拍数、HF値、LF/HF値の増減のみからEMDRの効果を検討した研究が散見されるが、例えば心理的介入によって心拍数が低下することが望ましいといった暗黙裡の前提が置かれており、その前提自体の妥当性が検討されてこなかった。本研究で得られた結果は、自律神経系全体のバランスを見ていくことの重要性を示すものであり、今後の研究に寄与するところが大きい。

論文の記述には含まれないが、こうした考察、判断において、トラウマ関連障害について著者が持つ十分な治療経験が基盤になっていることが審査の過程で評価された。また、EMDRの実践経験が豊かな外部審査委員、田中究氏からも、研究の目的、方法、結果のいずれについても高い評価が得られた。

なお、本審査においては、本論文の第4章と第7章に相当する内容が、『EMDR研究』誌に、それぞれ査読を経て論文として発表されていること、うち第7章にあたる論文が学会賞を受賞したことも判断の参考とした。

人間科学専攻では、本論文の第一稿完成後に、複数の教員による綿密な事前審査および指導を行い、修正を経たものが10月18日に提出された。その後、各審査委員の審査を経て、12月12日に口頭試問において質疑を行った。続き、1月21日に公開講演会を開催し、その他の専攻教員も含めた口述試験を行った。審査員による最終審査会議を経て本報告をまとめた。

以上の審査結果を総合して、審査委員会では、5名の審査委員全員一致で本論文提出者、三島利江子氏が、博士（文学）（甲南大学）の学位を授与されるにふさわしいと判定する。